

&lt;翻 訳&gt;

## シュレッツァー「旅行論」講義

——抄訳及び紹介

中 村 康 二

筆者は平成九年度後期の講義科目「国際文化論Ⅳ」において、主としてドイツのガイドブックの諸類型とその歴史的変遷の紹介を試みた。しかし17世紀から18世紀にかけてのケーラー (Johann D. Köhler) やシュレッツァー (August L. Schlözer) あるいはポッセルト (Franz Posselt) に代表されるゲッチンゲン学派のアポデミック (Apodemik) については、時間の制約上、割愛を余儀なくされた。本稿はその空白を補うべく受講生に追加資料として提供する目的でまとめられた。

以下に抄訳を交えて紹介するのはアオグスト・ルートヴィッヒ・シュレッツァー (1735-1809) が1792年から1793年の冬学期に、ゲッチンゲン大学で行った Reise-Collegium, つまり旅を主題とする講義録の一部である。原文は聴講者のひとり、フレデリック・シュトウトが書きとめた手稿のファクシミリ版並びにそのトランスクリプションである。

Das Reise-Collegium des Hofrath Schlözers gehalten im Winter 1792-1793 & nachgeschrieben von Frederik Stoud. In: Uli Kutter: Reisen-Reisehandbücher-Wissenschaft. S. 334~S. 371, Deutsche Hochschuledition Bd. 54 1996

最初に講演者シュレッツァーについて、手短かに紹介しておく。今日わが国では一部の専門家を除けば殆ど知る人とていないこの人物は、18世紀の後半、特にかれが「文通 (Briefwechsel)」及び「国事報知 (Staatsanzei-

ger)」と題する政治色の強い新聞を発行するようになった1775年以来、ドイツの知識人士の間で、立場の違いを越えて、熱烈な支持を受けるにいたった。マックス・フォン・ベーンによると<sup>(1)</sup>、かれは「政府の無数の悪弊と失策をさらけ出し、検閲、拷問、奴隷制といったかたちでなお存続しつづける中世社会の残滓を攻撃し」<sup>(2)</sup>、その健筆を通してドイツ社会に「一種の世論ともいふべきものはくぐくむ」<sup>(3)</sup>のに大きく貢献した。他方でシュレッツァーは「草深き里」<sup>(4)</sup>に建設されて日も浅いゲオルギア・アウグスタ校（ゲッチンゲン大学の別称）にあって、歴史学と大学統計学を講じた。大学統計学とは人口統計学、地理学、文献学、経済学、行政学を統合する、今風にいえば極めて学際的な学問であり、ここに紹介する彼の「旅行論」も、そうした「経験的社会研究」<sup>(5)</sup>の一翼を担うものと位置付けることができる。

(1) vgl. Max von Boehn; Deutschland im 18. Jahrhundert. Die Aufklärung. Berlin 1922 (邦訳書, 飯塚他訳「ドイツ18世紀の文化と社会」三修社, 1984。なお同訳書ではSchlözerの名称は「シュレーツァー」と延音で標記されているが, 本稿では「シュレッツァー」とした)

(2) 同掲書 S. 98

(3) 同 S. 98

(4) エンゲルハルト・ヴァイグル「啓蒙の都市周遊」, 岩波書店, 1997 S. 289 (本書はドイツ語版に先立ち雑誌「思想」(岩波書店)に連載された。参考としてドイツ語版は下記の通り。

Engelhard Weigl; Schauplätze der deutschen Aufklärung-Ein Städterundgang, Hamburg 1997)

(5) 同掲書 S. 305

## (1)

「1777年にルプレヒトで行なった講義草稿。

ケーラーの旅行論 (Reise-Collegium) はあらかじめ大都市の名所旧跡の案内に終始している。

ベルヒルトはその英語のエッセイのなかで学生たちに旅行上の注意義務を数多く教示しているが、いささか政治と統計学に深入りしすぎてい

て、旅行論になじまない。（以下、海上、陸上、雪上の三分類に続く主として海上旅行に関する詳細は省略）」

1777年の草稿とはゲッチンゲンの書肆ファンデンヘックから講義録の予告として頒布された小冊子「新聞論及び旅行論の講義草稿」の内容と実質的には同一のものと思われる。ウーリー・クッター（Uli Kutter）によると、この草稿は6章20頁からなり、各章の内容は次のように構成されている。<sup>(1)</sup>

- 1) 旅行の形態
- 2) 旅行の費用
- 3) 旅行の理由と目的
- 4) 都会への旅
- 5) 旅行の一般的規則
- 6) ゲッチンゲンからパリへ、実例にもとづく旅行案内の試み

(1) Uli Kutter: Reisen-Reisehandbücher-Wissenschaft, S. 252, Ars Una 1996

ケーラー（Johann David Köhler, 1684–1755）はシュレッツァーより一世代前の、同じゲッチンゲン大学の歴史学担当教授で、同大学が「歴史学の補助科学としての統計学と地理学」<sup>(2)</sup>を重視し、関連分野の文献や資料を精力的に収集するにあたり、多大な貢献をした。今日ゲッチンゲン大学がこの分野の百科全書的な資料の宝庫として名高い所以の一因もかれらの努力に求めることができる。しかしここでのシュレッツァーの講義の意図するところは、あくまでも「学生たちに実践的な旅行の仕方を伝授すること」<sup>(3)</sup>にあった点は留意するに価しよう。

(2) ebda., S. 261

(3) ebda., S. 252

## (2)

「旅行一般について。古代、ドイツ人は傭兵として旅をした。ヘロドトスの護衛のなかには多数のドイツ人が含まれていたし、シーザーにして然り。征服者、植民者、巡礼、ハンザ同盟の商人、また職人、王族、学者として旅した。学者たちの旅はおよそ250年前に溯ることができる。ドイツ人がかくも多く旅した理由は、1) ラテン語とドイツ語さえできれば、それ以外のヨーロッパの言語は容易に習得できたからであり 2) ドイツの (deutsch) 大地が総じて地味に乏しく、国外に糧を求めざるをえなかったこと等が考えられる。

他方、旅というものをほとんどしない国民もいる。思うにその理由は、1) 宗教上の理由、古のエジプト人や今日のトルコ人の例に見るごとく 2) 国外への金品の持ち出しが禁じられたため、殊に空っぽの頭と病に冒された体で帰還する若者たちの不行跡を防ぐため 3) 言語 (上の障害) 4) 旅のエスプリの欠如、かつてのスペイン、ポルトガルのごとく。

個々の人々が旅行をしない理由は何か。1) 旅先での病を懼れるが故に、とはいえ旅はきわめて有効な療養の手段でもある 2) 旅行の意義と楽しさを知らないため 3) 資金不足 4) 外国語の知識欠如、イタリア語ができればほぼトルコ全土を旅行できる 5) 業務上及び家庭の事情 6) きちんと料金を払って駅馬車で旅することを厭う愚かな悪弊 7) 例えばスペインのように、旅路を快適に過ごすための条件が未整備 8) 旅の安全が保証されている国がいまやどこにも存在しない。

旅行術 (Reisekunst) は実践を通して学ぶこともできよう。しかしそのためには途方もない授業料を支払うのを覚悟しなければならない。」

続いてシュレッツァーは1619年に刊行されたベルンエッガー (Bernegger) の「学術行脚 (de peregrinatione studiosorum)」からベッヒトルト伯 (Leopold v. Graf Bechtold) の二巻本 (1798年) の「紀行文集」に至る、旅行者に必須の文献に言及する。しかしかれの関心の所在は好事家的な資料の探索にも目録の作成にもない。

「旅はあらゆる学術研究と同様に価値ある研究活動である。旅行術の相当部分は近年の著述から学ぶことができる」<sup>(4)</sup> と述べ、実用に徹する姿勢を保持する。

(4) S. 343, in: Vorlesungsmitschrift von F. Stoud. Ws 1792/1793

### (3)

「賢明な旅行者のなすべき活動: a) 見ること b) 聞くこと c) 集めること d) 書くこと e) すすんで人に会い、語り合うこと。

a) 見ることは旅行者の本務であろう。およそありとあらゆるものを見ること。何であれ見逃してはならない。見たことがいつ役立つのか、それともたんなる目の保養として終わるのか、知れたことではない。目前の有用無用に価値をおく考えはひとの採るべき態度ではないし、また見たひとに有益なことであっても、その見たことに新たな知見が備わっていなければ、他者の与かりしらぬ体験となろう。何を見るべきか。どのようなものが旅の本来的テーマとなるのか。

aa) 風光明媚な土地のごとき自然 bb) 芸術 cc) 宮廷の祝宴や戴冠式のごとき期せずして遭遇する出来事……。記録にないものを見るべきであろうし、もしそれについて何か書かれたものがあるなら事前に目を通しておく必要がある。また訳の分からない仕来りであれば近づかぬが無難であろう。如何にしてもものを見るべきか。下僕には道案内はできても、見るべきものをひとに教えることはできない。それは事前に自分自身で決めておくことである。特殊なものをみようとすするなら、その系統の全容を把握しておくことが望まれる。そうすることが見るものに対するより深い感情移入を可能にするからである。例えばブラウンシュバイクのマントゥヴァ様式の家屋を見たければ、予めその関連文献を読んでおくことだ。さきに読んでおきさえすれば、いざ実物を見たあと容易に忘れないであろう。事柄の一般的知識を前以て身につけておこう。フランスの造幣局に関する資料を読んでおけば、見学も有意義であり、質問するになんら臆するに及ばない。カトリック教会のように常時公開されている施設もある一方、ゲッチ

ンゲン大学の図書館のように開館時間の決まっている施設、なかには閉鎖されていて、入場には下級官吏、時には上級官吏になにがしか金品を手渡さなければならないところもある。」

(4)

「b) 聞くこと。この世界で見ることができるものは限られている。ひとは聞くことにより見ることに何かを知る。パリの人口は目に見えないが、会話、つまりはひとの話を聞き、尋ねることによって知識を深めることができる。食事はこころして共同食卓 (table d' hote) で行うがよい。その土地のことは覚えよ。外国語の習得には四つの段階がある。1) 書物を読める 2) ひとの話を聞き取れる そのためには教会で説教を聞き、芝居を観るのもよい 3) 書くことができる 4) 自分で話すことができる 5) 流暢な発音。

(1793年1月3日)

ことばはぜったいに必要な手段であり、旅の目的である。外国語をふたつ以上知らないで、歴史や統計学の学徒となることはできない。

外国語を体験的に (ex usu) 易々と修得してしまう天才もいるが、おおかたはその幸運に恵まれていない。子供には往々この種の才能が備わっている。ある父親がこのようなことばの才能にめぐまれた息子をハンブルクからボルドーへ半年の予定で送り出したところ、この子はその間にすっかりフランス語を覚えてしまったという。子供には体験をつむことでことばを修得させればよく、文法は自ずとあとから身につくものである。むろん才能なきものは文法から始めるにしくはない。」

(5)

「c) 集めること。旅先から持ち帰るものが何ひとつなければ、そのひとは思想上も還すべきものを持ち合わせていないと咎められても致し方ない。(旅先で) 何を収集するのか。1) 記念帳 (Stammbuch) 2) 将来自分が研究しようとするもの、統計学者にとっての政治便覧 3) パンプ

レット, チラシ類 4) 新しい法典法規集 5) 国勢 6) 生産物の特徴, 例えば商品の見本やサンプルカード。たとえ他日の研究を期して収集するものであろうと, 細部の確認はその場ですませておくに限る。後日自分のちからで明らかにできない或いは説明できないところが必ず出てくるにちがいないのだから。例えば人の肩書きや地位, 工芸品の技術用語。どれほど多くの事典を持っていようと, ものには後の祭りということがある。

d) 書くこと。記憶として間違いなくとどめておくのが難しい事物のディテールやどうしても忘れてたくない事柄は日記に記録しておく必要がある。また自分或いは他人がいつか利用する可能性があることも書きとめておく。とにかくまめに記録をとりつづけることによって, 最新の情報を蓄積できるのだ。友人に手紙を書くのも, 情報保存の一策であろう。手紙は自分の足で宿駅 (Post) まで持参する。自宅から届く手紙を確実に受け取る手筈も怠ってはならない。詳細な記録を認める機会がない日が何日も続くときは, 名前等のかく忘れがちなデータは手帳に書き込んでおくべきだろう。

e) 会話。会話はひとに礼儀作法を, 遠慮と不躰の程合いを, そして立ち居ふるまい教える。会話を成り立たせるためには, 慌ただしい旅 (fliegen) は避けなければならない。さもなくば旅先で知り合うのは御者とか宿屋の亭主ばかりになる。宮廷に出向いて名刺を献上する程度では, それは決して会話というに値しない。」

## (6)

「硬貨 (コイン) について。貨幣陳列室見学。a) 古代ギリシャ及びローマのコイン b) メダル, これは全く無用の代物 c) 近現代のコイン。パリにはこれまでフランスで鑄造されたコインをすべて収蔵する博物館がある。ドイツは自国のコインを収集する努力を怠ってきた。リュウベックには近年ミュラー某なる資産家が多大な資産を投じて収集したリュウベック・コインのコレクションが寄贈されたという。参照: リュウベックのコインとメダル記念館, 音楽総監督シュノーベル, リュウベック 1790。

金と銀は世界のどこでも同等の扱いをうける。ハルツ地方の銀はペルー

の銀と等価である。しかし一般的には国が変わればその貴金属の価値も変わってしまうものであり、例えばロシアの鉄は品質においてスエーデンの鉄に劣る。

そこで銀1ウンツェを1ターラー、銀1ロートを1グルデン、金1キンタールを1ドゥカーテンと換算する方法を思いついた。プロイセンと故フォン・ビュッケブルク伯領を除けば、1と2分の1ロート銀貨はほとんど使用されない。(中略)

お金 (Gelt) というドイツ語はなかなか面白いことばで、このことばはなんにでも当てはまる。

エチオピアでは塩が主たる賃金であったし、奴隷海岸では黒人奴隷400人から480人が1ルピーと交換された。古代においては[重さ]と[価値]の比率は1対10であったが、アメリカ大陸の発見以来、事態は一変する。銅はもはや補助貨幣の役割しか果たさなくなる。1) 安価な鑄造が可能になったこと 2) 品質の差がはなはだしくなったことが理由と考えられる。交換レートはどんな書物にも記載がない。シュレッツァーは情報をリュウベックから得ているという。現在ルーブルは12ロートで、東インド・ルピーは重量にしておよそ1ロートと等価とされている。

コインの態様は多種多様である。

- a) 時代により。ヘブライ、ギリシャ、ローマ、ビザンチン、アラビア、ヨーロッパ。フランク族はすでに5世紀にゼクローロを使い始めている。
- b) 国により。
- c) 大きさにより。
- e) 形状により。シュレーゼンやウルムでは丸や四角のコインが造られた。厚いもの、薄いもの。ビュッケブルク伯は極上の銀を使い、古代の様式を模して厚手のコインを鑄造させた。(訳者注: 原文では項目d)が欠落)
- f) 材質により。七年戦争の時代には4ロートの重さの金貨が印造された。
- g) 刻印(紋様)により。鑄造責任者(マイスター)がいないため、極印のみで紋様ぬきのコインもある。15世紀ハンガリーの王ヨーハン



の発行した上質のコインのいくつかはその例である。また偽金と区別するため、二重に刻印が打たれているコインもみられる。（中略）

手形制度が成立するためには、四人の人間が前提となる。例えばゲッチンゲンの雑貨小売商がハンブルクの卸元から 100 ターラーで香辛料を購入する。他方ゲッチンゲンの書籍商がハンブルクの学者に 100 ロートの書物を郵送する。小売商は書籍商が 100 ロートの支払いをハンブルクの知人のだれかに依頼する必要があることを聞き及ぶ。そこで小売商は書籍商に 100 ロートを代理決済し、書籍商から領収証書を貰う、そしてハンブルクの学者に宛て香辛料の卸元に代金を支払うよう郵便で連絡する。これが手形の振出し通知状（Avis-Brief）といわれるものである。小売商は領収書か手形を卸元に送る。書籍商が手形の振出人となり、小売商はその受取人となる。手形を受け取った香辛料の卸元は手形の呈示人となる。なぜならかれは手形を学者に提示する立場にあり、学者はこの手形を引き受け、支払いの用意があるかどうかを問われることになる。学者がこの支払いに同意すれば、かれは手形の引き受け人ということになる。」

### （7）

「徒歩旅行はなんら蔑むものではない。ホルベルクは経済的理由により歩いて旅した。懐具合を気にしない者でも、徒歩で旅をすることがある。それが心地よいからでもあるし、また職業上の必要に迫られてする場合もある。天候、道路事情、季節、土地柄、これらすべてに恵まれたとき、ひとは漫ろ徒歩の旅に誘われる。歩くことは、慣れてさえしまえば、馬や車よりその負担はずっと軽微ですむ。郵便馬車を通るような街道では土着の人と親しくなるのははまれであり、風光明媚な自然の景観にふれる機会も逃してしまうだろう。なぜなら乗合馬車は危険を回避できる道がほかにあれば、あえて景色の美しい、しかし危険な土地を好んで通りはしないからである。

仕事上植物学者は歩いて行く。

徒歩の旅を好まない理由は何か。ひとつには体面という間違った自尊心のゆえに、またひとつには軟弱さのゆえに。ひとは歩いて旅する術を会得

しなければならない。」

(8)

「駅馬車による旅。

政府が人や馬を公共の用に供する目的で、ある程度の遠方まで、昼夜を問わず、差し向けるための制度、それが駅遞である。ローマ人は駅遞の施設を専ら国事に拘わる火急の用事を伝達する目的で作り上げた。古代ローマ法のパンデクテンには駅馬車制度にまつわる専門用語が頻繁に現れる。パリ大学は世界で初めて郵便の理想を実現した。そこで今日でもこの大学の教授たちは給与を郵便で受けとっている。とはいえそれは大学内部の関係者に限られていたが。1464年、公衆のために開かれた真の郵便制度がルイ11世の手により完成した。

(2月14日)

Hr. フォン・ボイルヴィッツ：駅遞制度の歴史。

宿駅も宿屋もない昔の人々がどのような旅をしたかを理解するのは殆ど不可能にちかい。ルイ11世は1464年にパリ・リヨン間に最初の乗り継ぎ馬車を設置し、自分と交渉相手の豪胆王カールとの意志疎通を密にしようと企てた。

しばらくすると王家の乗り継ぎ馬車と大学の駅馬車のあいだに利害の対立が発生する。しかし1480年になると、事態は完全に公衆の便宜を重視する方向へと転換する。イタリアの商人タキシス家は絹製品をオランダに輸出していたので、自らの経済的思惑から、イタリアとオランダを結ぶ乗り継ぎ馬車を開設したが、この施設もほどなく一般に公開された。タキシス家は皇帝から勅許状を授けられたものの、その範囲は世襲領地内に限られていた。いまや皇帝の宮廷も生臭いにおいに包まれ始めていた。タキシス家の郵便事業は今では毎年100万グルデンの利益をあげている。」

(9)

「公道 (Chaussee) について。公道を発明したのはローマ人である。し

かしその発明の意義もやがて顧みるひともなくなった頃に、シュリー（Sully）の手でフランスに導入された。1763年にはドイツでも公道の建設が開始された。ドイツ版公道がシュトラセンドamm（Straßen-damm）である。昔の道は曲がりくねっていた。自然に出来上がった道がもとになって、そのうえに無計画に造ってきたからである。各国の政治体制が確立して以降、ようやく河川に橋が架かり、沼地が灌漑された。いち早くこの種の事業に着手したのは、西暦1100頃のスウェーデン王であった。アッピア街道、フラミア街道といったローマの公道は整然と敷石で舗装されていた。ローマからカディスまで、ミラノからマインツまで、公道は途切れなく延びていた。これらの道は主として部隊を迅速に移動させる軍事目的に利用された。中世にはいと、公道は荒廃し、驚くことにあのカール大帝でさえ道路に無頓着であった。それは結果的には野蛮な輩の跳梁跋扈を許し、悪路がひとつひとつの通信をいっそう困難なものにした。シュリーは公道建設の機運を盛り上げた。1763年、公道はようやく帝国協議会の俎上にのぼり、着工の運びとなった。最良の公道はオーストリア領内にある。

公道利用の意義： 1) 快適な旅行、足止めから解放されるとともに、車輪の故障や横転事故が減少した 2) 速度及び 3) 安全性（の向上） 4) 以前ほど馬を使わずにすむため、安上がりになった 5) 宿駅の間がいっそう狭まった 6) 御者は我が国の如き公道のある国を優先して走る 7) 獣道を通り税をごまかす輩が消える 8) 曲がりくねった道を改修することにより、耕地の整備がすすむ 9) 夜中でも旅ができる 10) 御者が穀物畑を横切り、農地を荒らすことがない 11) 道に迷わない 12) 里程標から歩いた距離がわかる

公道の欠点： 1) 馬にはかえって負担をしいる、かつて馬は15年の使役に耐えた、しかし今日では10年で寿命が尽きてしまう、（中略） 2) 付近に石がないために建設の断念を余儀なくされる、さもなくば 3) 採掘される自然石が役にたたず、公道はたちまち穴ぼこだらけになる 4) 建設に莫大な費用がかかる、ハノーバー公国では一部ボランティアの援助があったにも拘わらず、たった数マイルの道路に3万ロートを要した 5) 公道に投下される資本に通常利子につかない 6) 費用が莫大であるばかりか、中にはそこから生まれる利益以上の維持費がかかる場合すらある。

フランスの公道は [(字句不明)] によって維持されている。貴族や市民が資金を拠出したことはない。7) 通行料を納めなければならない、その額は適正ではあるが、公道の通る地域はその利益に与かることができても、建設を最初に発案した人々や土地に利益は還元されないのである。」

## (10)

「旅館兼飲食店 (Wirtshaus): 宿屋 (Gasthof) がなければ、旅して歩いた世界を思い出すのも難しい。宿屋は文化の良き指標であり、信用のおける確かな宿が多いほど、その国の文化レベルは高いといえる。宿屋が発生する以前には、居酒屋 (Taverne) があった。そのあと宗教が宿坊 (hospitia) を建設する。ヨシュア記を読むと、すでにフェニキアには居酒屋があった。ギリシャ時代になるとそれは悪所に似た風評芳しからぬ場所となった。古代ローマ議会では旅行中を除き聖職者が居酒屋に立ち入ることは禁じられた。(中略)

トルバドゥールは吟遊詩人であり、チターを片手に世界中を巡り歩き、その天賦の才を生かして歌い演奏してまわった。

宿屋はやがて旅人を泊めてもてなすことを義務づけられる。1662年当時でもスエーデンの宿屋は聖職者にたいしこの義務を負っていた。

ファブリティウスはノルウェーのドロンテムには今もって宿屋がないと嘆いている。

ヨーロッパとアジアの宿坊 (hospitia と chane)。古代ギリシャの hospitia は旅行者を仲間として受け入れる互助組織であり、クセノドキアは巡礼宿であった。コルバイ出身の聖アンツガリウスはクセノドキアを紹介し、ブレーメンに同種の宿を作った。デンマーク王クヌードは清貧の誓いをたてるべくローマへ旅したおり、ローマに詣でるすべてのデンマーク人のために宿泊と食事を提供する施設を寄進した。またデンマーク王エリックも 1098 年にルッカとピアケンツァに hospitia を建設し、デンマークの巡礼や商人たちに寝所と食事を提供した。ここではワインも饗されたという。

修道院付属の救護院は幅広い活動を行った。しかしまさにそれこそが閉

鎖にいたる真の原因であることは、何人も否定できない。

chane はヨーロッパの hospitia と同じ位置をアジア（ペルシャ）で占めている。宏大なくつもの部屋に分かれた建物。旅行者はおのあの番人から自分とラクダのための部屋をあてがわれる。しかし食料品やベット等の用意は自分でしなければならない。それでも身の安全は保証されているのだ。

本来の宿屋（Gasthof）は10世紀のドイツに誕生した。Gasthofとは、旅人を泊めることが許され、また泊めてやらねばならない、そして所定の料金を支払うことにより、金銭のいかんにかかわらず安全が保証されている場所である。（中略）一流の旅館（Wirtshaus）の宿泊費は一泊1/2ロート銀貨であり、昼食代もそれにちかい勘定になる。夕食はその半分。コーヒーないし茶は一人分2～3グロッシェン。従ってひとり一泊すると総額1ロートほどになる（以下略）」

---

シュレッツァーの旅行論講義録は、上に抄訳したように、学生の手書きノートの写しであり、従ってそれ自体著作の一次資料としての一般的価値があるわけではない。また論述の体系的展開にもたぶんに欠けるところがあるのはいうまでもない。筆記者のフレデリック・シュトウトはこの講義の聴講時は33歳で、通常の学生のイメージで捉えることはできないが、200年前の教室のオーラを多少なりとも想像してみることはできる。しかしそれにしてもこの講義録には他に資料としてどのような価値ないし意味があるのだろうか。そもそも18世紀末のゲッチンゲン大学の歴史学者がなにゆえに「旅行術」を学生に講義しなければならないのか。

かつて旅することがそのまま教養（形成）であった時代がある。ドイツに則していえばとりわけ17世紀から18世紀、30年戦争の混乱と荒廃を経た、いわゆる啓蒙主義の時代に、そのような認識は広くつよく浸透していた。ユスティン・シュタークル（Justin Stagl）の編纂したアポデミック（ギリシャ語の *αποδημειω* に由来し、旅行術に相当する語義をもつ）の文献目録<sup>(5)</sup>には、マルチン・ツァイラー（Martin Zeiller）をはじめ、100名

余のアポデミカーとかれらの版を重ねた夥しい著作の数々が紹介されている。これらの著作はその徹底した実用主義的性格のために、書店の実用書の棚に繰り返し並べられる「写真の撮り方」や「社交ダンスの入門書」のように、そのつど繰り返し消費・再生産された。そしてその文化史的価値や時代の社会的背景との関わりはこれまでほとんど顧みられることがなかった。旅行の観光化、娯楽としての大衆化・産業化が高揚した現代のような時代には特に、旅行の指南書や同種の講義などはいかにも珍奇な印象をひとに与えるにちがいない。

(5) Justin Stagl u.a. (hrsg.); Apodemiken Ferdinand Schöningh, 1983

シュレッツァーは講義のなかで再三にわたり歴史と統計学に言及する。この時代、シュレッツァーのような歴史学者にとって民俗学的な資料や政治や法制に関わるデータの収集と分類、そしてそれらの統計学的手法による百科全書的知識の拡充こそが最大の課題であった。かれらはそのため自らに困難の予想される旅を敢えて課し、言語、地理、産業、宗教など多方面にわたる研究のいとぐちを涉猟して歩いた。民俗(族)学、地理学、宗教学、言語学の先駆をここに窺うことができる。それゆえ旅行は研究者に必須の要件として、その内容と形式を体系化し、学生に提示することが要請された。旅こそはかれらの知識の方法であり、源泉であった。

この種アポデミックの類書を例えば同時期のわが国に求めるとすれば、文化七年(1810年)に八隅廬菴が刊行した「旅行用心集」や天保十年(1839年)刊の平亭銀鷄の「江の島まうで、浜のささ波」等がこれに相当するであろう。「旅行用心集」はその冒頭に「道中用心六十一ヶ条」を掲げ、旅先での心得の逐一を、例えば次のように懇切丁寧に説く。

「普通の旅行で、とりたてて急ぐのではないならば、夜は決して歩いてはならない。どんな旅でも、九日で行く距離を十日で行くつもりでいれば、急いで夜に歩いたりするよりも、よほどいい点が多いものだ、云々。」<sup>(6)</sup>

ここにはたしかにシュレッツァーの「旅行論」講義にも通底する、洋の東西を越えた普遍的な知恵のひとしづくが認められる。しかし例えばマルチン・ツァイラーの千頁をこえる「道中案内 (Itinerarium)」等と比較す

ると、「旅行用心集」はいまだ経験主義の範疇にとどまり、その方法（メトード）の示す体系への強固な意志と博搜において、一步譲らざるをえないであろう。

(6) 八隅蘆菴（桜井正信監訳）「旅行用心集」，八坂書房，1993年26頁